

---

# 霸王竜は空に吼え

桐月那雑

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

霸王竜は空に吼え

### 【Nコード】

N39410

### 【作者名】

桐月那薙

### 【あらすじ】

その場所は、見知らぬ空と大地が広がる世界だった。わけもわからず突然やってきてしまった上に、竜の姫君に見初められた天宮千裕。これは、少年と竜といろいろ騒がしい周囲の物語。

## 突然放り出された空の下

少年は、変わらない毎日を過ごしていた。

朝目覚め、家族との朝食の時間を過ごし、学園で友達とバカをや  
り、帰り道には遊んだり、帰れば再び家族との団欒。

毎日が平穩だった。いや、少年にとってはそれなりに張り合いの  
ある日常だったのだらう。

バイト先でムカツク先輩とやりあたり、可愛い女の子を見かけ  
てナンパをしかけ玉砕したり。そんな思い通りに行かない世の中を  
生きているのだから。

だから、その世界に不平も不満もあるわけではなく、将来だってい  
つかやりたいことが見つかるだろうと軽くかまえ、今を楽しく生き  
て、この先も続くであろう日々を夢想する。

だけど　きっかけなんて些細なこと。

それは、世界の理なんてまるで知らない少年にとって、ただの理  
不尽の一言に尽きる物事の始まり。

「あれ……?」

学園の帰り道。気がつけば、足元に何かコロコロと転がってきた。  
黒ずんだ金色をした球体。

それは少年の前を歩く、髪の毛の長い女性が引つ張って歩いているト  
ロリーケースにぶら下がっていたキーホルダーっぽいものだ。

なにせ、ケースの取手にじゃらじゃらと、どこで手に入れたのか  
不明なキーホルダー(?)がぶら下がっているからすぐにわかった。  
少年はソレを拾い上げ、女性に声をかけようとした。ただ単純な  
100%善意しかない行為。

だが、少年はその球体と目が合ってしまった。

「!?!?!?!」

一瞬吸い込まれるような感覚に陥る。

それは本当に一瞬だったのか。それとも永遠にも等しい時間だったのか。少年は知る術のないこと。

まるで、自分が自分で無いような時が過ぎ去った後、少年の意識が戻ったとき、気がつけば少年の周囲は蒼い空の中にいた。

「!?!?!?!?!」

再び声にならない声を上げた。

が、それになにがどうなるわけでもなく、重力の法則は無常にも少年を遥かに遠く見える緑の大地へと引き寄せていく。

が 少年は更なる悲鳴を上げたくなかった。

緑の大地から蒼い空へ、重力の法則を無視して駆け上がってくる銀色の山を見たのだ。

グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

山が吼える。

いや、もう現実逃避をするのは止めよう。

あれは竜だ。

古今東西のフィクションで扱われる伝説の生き物。少年のイメージにたがわぬ巨体と威圧感。

その竜が少年に向かってその巨大な口を開き再び吼える！

「くぁwせdrftgyふじこrip~」

もう、声にならない声と、泣きたい気分ではしゃいだ少年の目の前に竜の顔が近づくと

「よく来たな! ワシの花嫁よ!」

あまりにも場違いの言葉に、  
俺は男だから、ソレを言うなら花婿じゃないのか  
などと場違いなコメントが頭に浮かぶ。

これが少年 あまみやちひろ 天宮千裕と、生物における最強種である竜の中  
も『霸王竜』と呼ばれるもっとも尊い竜の姫君、アルベリアとの出  
会いと始まり。

そして、千裕が見知らぬ空の下での日常が幕をあけるのであった。

## 突然放り出された空の下（後書き）

ピピッと電波を受信し、突発的に書きたくなってしまった。  
絶対に不定期更新です。



ここでも当然、北の山より聞こえる竜の咆哮が響きわたっていた。その声を聞いたとたん、白衣の女性は思わず銜えていたタバコを落とすほどの衝撃をうける。

「おい……今、竜の鳴き声が聞こえた気がしたんだが……」

だが、その言葉の音色からは、驚きよりも呆れた感が強かった。

「ですね。ついやってきたのでしよう、あの方の伴侶が」

少女は女性の言葉にも笑みで返しながら、窓の外を見れば、空にその優雅な巨体を躍らせ舞う竜の姿が確認できる。

「うへえ、わざわざあの竜の犠牲にたるために、遠いところから苦勞さんだな」

「あのですね、その方は犠牲ではありません。あの方風に言うなら花嫁です」

「だが、あの異邦人風の言葉にならえば間違いなく生贄なんだけだな」

お互いの視線が交わる。長い付き合いだが、本音と建前を使い分ける少女と、本音とイジワルな言葉を使いわけける女性とは、こういう場面では相性が悪い。

お互いならみ合って　　というより、少女の方が一方的に脹れた顔を見せて無言の時。

「それで、我が降竜殿の巫女様としましては、この状況をどうなさいますか？」

ここでヘソを曲げられたら話しが進まないので、女性の方から折れて、話しを元に戻す。

「それは当然、あの方達の元へむかいますよ。伴侶の方は、この世界のことを何も知らないでしょうし」

「そうだな。なら私も付いていこう。再びこの世に現れた異邦人の姿を見たいしな」

あなたは降竜殿こりに住んでいるのだから、ついてこなくても見れる



でしょう、と少女は呆れたように溜息をついた。

「私は医学知識もあるのだぞ。異邦人の容体次第では出番があるやもしれん」

「それで、本音としましては？」

「当然、あの竜の相手をする不運なヤツをいの一に笑いたいたいからだ」

永い付き合いだが、目の前の女性の性根の悪さはどうにかならないものか、といつも頭を悩ませるところだ。しかし、こんな性格だからこそ共にいられるのだと言うこともまた知っている。

「それでは早速参りましょうか。王都の方にはすでに早馬は出ているでしょうし、使者が来る前に伴侶の方にはできるだけ事情を知っててもらいたいので」

「だな。ひひひ、さてどんなヤツが来ているのやら」

気味の悪い笑いは止めてくださいと、頭をはたいておく。

そして二人は立ち上がり、懐かしき竜のもとへ向かって歩き出す。

あの日交わした約束と、これから始まる日々のために。

人生によくある劇的な出来事、でも大概本人は蚊帳の外から始まる

場面はもどり、千裕と竜の邂逅後。

「し、死ぬかと思った……本当に死ぬかと思った……！」  
大事なことなので二回言いました。

あの後、竜の腕に握られ（ここでも握りつぶされないかと本気でビビった）て地上に降ろされたため、激突は避けられたのだが、地面に立った瞬間足が震えだし、今も止まらない。

なにせ、夢とも現実とも区別がつかない間に、気がつけば強制スライディングをやらされ、さらに巨大生物の突進を目の当たりにしたのだ。

おしつこちびらなかったことを逆にほめてほしいぐらいだと千裕は思う。

「よく来てくれたな、ワシ花嫁よ。あやつの約束を信じ、待ちわびた甲斐があったぞ」

ぶふん、と木々を靡かせる鼻息を出しながら、かわいらしい少女の声で巨大な竜が喜ぶ光景は不気味を通り越してシニール。

だが、千裕にとってはその巨体がちよつとでもぶつかるだけで押しつぶされそうになる光景が目には浮かんでは消えるため、竜の機嫌を損ねないようにどんな言葉をかけるのが適切なのか必死で探す。

が、千裕の理解の範疇を超えた出来事を体験した後のパニックを起こした頭では、とてもこの場に適した言葉が浮かばない。

「ん？ どうした、先ほどから震えて。ああ、お主は人の身だしな。空の風はさぞ冷たかっただろう」

絶対違うから！ といつものノリで突っ込みを入れなくなつたが、恐怖が言葉を飲み込ませる。

「フム、初対面同士、緊張しているはわかるが、もう少し肩の力をぬけ。などといいつつワシも緊張しているのだがな」

わはは、と笑う竜。

いつもなら、嘘だ！ と瞳孔開いて突っ込んでいるぞ、と、千裕は内心思いながら、なんだか緊張が解けてきた気がした。

なにせ、目の前の竜はいつもどこかで相手をしている人物そっくりに見えてきたのだから。

どこか傲慢な態度でありながら、ピントのズレたボケた言葉。ソレでありながら憎めない気安さ。まるで、いつもべったりと張り付いて、友人にはブラコンだなと笑われていた姉を千裕は思い出していた。

これなら何とかなるか？ と勇気を出して話しをしようとしたら、

「しかし、うむ。お主の右目、似合っているぞ」

「は??」

思わぬところで思わぬ言葉。

千裕の人生において、右目単品を指してほめられたことなど一度も無い。むしろ、ほめる意味が解らない。

あまりの突飛な言葉に、思わず訝しげでありながら間抜けな声が出てしまった。

が、出た後でしまった、と千裕は慌てて口を閉じるが、竜の方気にした様子も無くあっけらかんと言う。

「お主の竜眼だ。シリコン・アイいや、正確には先代のだがな」

「??????」

千裕にとつて意味不明の専門用語が出てきて、無意識の内に顔をしかめていると、こんどは竜の方が驚いた声を出す。

「何だお主、こちらに来る時、あやつから何も聞いていないのか？」

聞いていないも何も、事故にも等しい切欠で来てしまった為、竜が誰のことを言っているのかすら理解が出来なかった。

「ならば鏡か何かで自分の目を見ることだな。ワシと同じ美しい金色をしているぞ」

そう言われて、千裕は慌てて持ち物を探ろうとして始めて自分が何も持っていないことに気がつく（たぶん、空に放り出されたとき

に全て手放してしまったのだらう)。とりあえず、制服の内ポケットに入っているケータイ（コレだけはポケットをボタンでとめていたから無事）を取り出す。

その取り出したブツを見て「うわっ、趣味の悪い色……」と竜自身は小声でつぶやいたつもりだろうが、地声がデカイため、千裕の耳にはしっかりと耳に届いていた（ちなみにシヨッキングピンクと蛍光黄緑のマーブルカラー。姉に塗装された）が、そんなこと今さらなので無視。

ケータイに張り付いている鏡で自分の顔を見た瞬間、

「何じゃ、こりゃあ！」

まるで自分の手についた血に驚いた刑事の様なりアクションを千裕はしていた。

なにせ写っていた自分の顔の右目が、日本人特有の黒目ではなく、まるで獰猛な肉食獣のような鋭い金色の瞳に変わっていたのだ。

「お主、何をそんなに驚いているのだ？」

「いや、だって、マジでワケわかんない。どうしてこうなった？」

「だからそれがワシの花嫁となる証だろ」

「だから、そもそもなんで俺が花嫁なわけよ!？」

もう、恐怖もおびえもすっ飛び、とにかく思うままに言葉を口から出していることに気がつくが、この際いけるところまで言ってしまうと開き直っていた。

「??? あやつは、ワシの花嫁となるにふさわしい人物を捧げると言っていた。そしてワシの期待に違わぬワシ好みの人物をくれたではないか」

あれ? いつの間にか俺この竜に気に入られてる? と、ここで始めて千裕は始めて事態の重大さに気がつき始めた。

「いやいや、捧げるとか違うから。俺、偶然金色の玉を拾って、気がついたらここにいただけだから」

「うむ、その金玉が先代の竜眼ドラゴン・アイだな」

うれしそうに金玉言うな。と千裕は内心で突っ込んでおく。

目の前の竜に言われると、なんだか股の辺りがキユツ縮み上がる思いがした。

「詳しい事情は知らんが、どんな切欠であれ竜眼リョウガンを所持してワシの前に現れたのだ、ワシの花嫁になってもらうことは約束されているのだ、そこは諦める。だが、ワシはお主を気に入っている。お主の寿命が尽きるその時まで、一生可愛がつてやるぞ」

ぐふふと、スケベオヤジが舐め回すように視姦する時のような下卑た声で竜が笑う。

可愛い声なのにすぐくもつたいたい、と残念な思いが一瞬でも千裕の頭によぎった時点で、もはやこの場に完全に適用してしまったのだろう。

しかし、現実問題として、この竜の勘違い　つまり花嫁ではなく、花婿であることに關して突っ込もうとした時

「むっ、やはり来たか」

いきなり竜が怪訝な声を出した。

視線も千裕から、その後ろの先へ。何かと千裕もそちらを振り向けば、現れたのは一人の女性だった。

明らかに手入れを怠ってぼさぼさの赤銅色をした長い髪の女性。よれよれの白衣を羽織り、タバコを銜え、やる気のなさそうな表情をしながらも、ただ、妖艶で美しい顔つきとナイスボディが、全てをプラスへ持つていくズルイ大人の見本というのが千裕の第一印象。だから、彼女の持つ紫紺の瞳の奥に見えた、言いようのない不気味な感じは、千裕の勘違いだと思いたかった。

「おーおー、やっぱり来てたか花嫁　……あれ、花……嫁？」

おいおい、アイツ明らかに男だろという、まさに確信を触れている目で千裕を見つめる。

千裕は、あの人は俺が男だって分かるんだとなぜか感動してしまつた。

「久しぶりだなマグナ」

「ああ、お嬢もな」

微妙に親しげではないものの、知り合いっぽい会話が始まるので、何とか女性に誤解を解いてもらえるよう一縷の望みを託し、この先の成り行きを見守ることにした。

「こうして顔をあわせるのもずいぶんになるな」

「そうだな、最後に顔を会わせたのはざっと三百年も前になるか」

あれ？　なんだかおかしな年単位が出てきたぞ？　と思いつながら、今は黙って話しを聞いていることが得策だと千裕は自分に言い聞かせる。

「相変わらず何も変わっていないお前その顔、何度見ても気持ちが悪  
い」

「仕方があるまい。それに、お嬢とてあれから変わった様子が見られないが？」

「人の枠組みから外れ、種の持つ寿命から百倍近く時の止まった日々を生きる貴様とワシを同じにするな。それにワシは四百年近くしか生きておらん。種の寿命から見ればあと百倍は生きられる。これからが成長時なのだよ」

なんだかいろいろと突っ込みたい気分になってきたが、今はまだ我慢。

「まあ、いいさ。それよりお嬢、それが例の　？」

「ああ、あやつは約束を果たした。この通りワシの下に花嫁がやって来たのだ」

「あー、でもそいつ男だぞ？」

「??？　オスだと何か問題があるのか？」

「いや、男だとあの異邦人が話していた花嫁の定義には当てはまらない気がするんだが」

待ちに待った言葉がキター！　と千裕は内心で小躍りを始めた。  
が、

「そうなのか？　だがワシはこやつを気に入った。問題は無い」

あれ？

「そうか、なら問題無いな」

なに？

「そういうわけだ、残念だったな少年。これから未永くコイツと暮らしてやってくれ」

女性はニヤリと不適な笑みを見せて、千裕の肩を叩いた。まるで始めから答えを知っていたかのような、意地悪い笑み。

この時の千裕の絶望感ときたら、もう言葉で語れるものではなかった。

「さて、マグナがここに来ているということは、アレもここに来ていると思うのだが？」

「ああ、来ているよ。だが、なれない山登りでへばっている」

「おいおい、なんでその程度でへばることがある」

「まあ、めつきり動くことが無かったからな　と、ウワサをすれば、だな」

「お、おまたせ……ゼー、しました……はー、な、なんで山の入り口までしか転送出来ないのかし……ああ、貴方が、花嫁、ですね……ゼーはー」

顔面蒼白でひーひー言いながら現れたのは、小柄な身の丈に合わないダボダボとした黒に金縁の黒衣を羽織った金髪の少女。ただ、マグナと呼ばれた女性とは正反対に、清楚（汗だくでそうは見えないが）で可憐（疲労でひどい表情だが）、それにどこか神聖な空気を持つ。まるで友人が話していたモニターの中の女の子みたいだと千裕は思った。だが、少女が持つその青い瞳は、まるで目の前にいる竜に似ていた気がする。

「遅いぞリノア。この別界からやってきたお客さんに、あれこれ説明するんじゃないのか？」

マグナのその言葉に、千裕は本当の意味で我に帰った気がした。そう、強制スカイダイビングとか竜との邂逅とか、常識外れの体験の連続だったため思考がバカになっていたが、よくよく考えなくても、千裕の暮らしていた場所に竜なんて非常識な生き物は存在しない。

それなのに、なぜその生き物が目の前にいるのか？

多くの娯楽フィクションで語られた設定の出来事が、いつの間にかノンフィクションの現実になっていたことに気がつく。

「ええ、そう……です、ね……ゼーはー……ふう」

大きく深呼吸をすると、リノアと呼ばれた少女は落ち着きを取り戻し、その青い瞳でしっかりと千裕を見つめた。

その小柄な容姿からは想像も出来なかった恐ろしいまでの威圧感。千裕の背中には嫌な汗がにじんでくる。

鼓動も早くなり、息が詰まる。聞きたくない、聞きたくない、頭で拒絶をしながらも、現実を受け止めるため聞かなければならないと理解している。

「貴方も既に、うすうすと感じていらっしやると思います」

「

その先の言葉は、耳をふさぎたくなる。でも、そうしたところで現実が変わるわけではない。

「ここは貴方の知る世界ではありません。あなた方の言葉で言うところの“異世界”にあたる場所です」

目の前が暗転した気がした。

（俺は一体どうしてこんなところにいるんだ……）

それは偽らざる千裕の本音だった



## 今いる場所と帰りたい場所

千裕は半ば予想が当たった事と、これから起こりうる事態に頭が真っ白になった。

「あら、放心してしまいました」

「本当に何も知らされずに来てしまったようだな」

「そのようだ。本人も事故と言っていたし」

片や、この世界の生まれである三人は、千裕の姿を見てどうしましようと言顔をあわせる。

「そう言えば、女性の方では無いのですね」

「ああ、私も驚いた。だが、お嬢が問題ないと言っているからいいのかなって」

「マグナ。貴方はどうしてそういい加減のですか。あの、すみません。少々お尋ねしてもよろしいですか？」

その後、リノアはどのような状況でココへ来たのかたずねたら、千裕はいかに自分が偶然でやって来て、今の状況が不本意なのか、身振り手振りでオーバーに語った。

語ったが、その後でちよつと後悔した。なぜなら竜が千裕を見る目がどこか冷たくなってきているのに気がついてしまったからだ。

いくら竜とは言え、自分のことをあれだけ気に入ってくれた相手に、問答無用で冷水をぶっかけるようなマネをしてしまったことに罪悪感を感じる。

「そうなのですか……どうしましょう。このままでは可愛そうです」

「おーおー、リノアはお優しい。なら、ここは私に任せろ」

「何か妙案があるのですか？」

「おい、ワシの花嫁に何をする」

あんなことを言った後なのに、まだ自分を庇ってくれるのか

と胸が痛くなる。

「いやいや、何をするってワケじゃなくてだな。ここはあの異邦人にならって」

マグナはポンと千裕の肩に手を置くと、ウインクをしながらサムズアップ。

「落ち込むな少年。このような出来事、お前の世界で言うのなら“お約束”というヤツだろ」

だから問題ないよな！ とあっけらかんと言われ、千裕はついにブチ切れた。

「うがー！ 何が“お約束”だ！ ならどうしてこうなったか説明してみろ！」

やけくそ気味にわめく千裕だが、他の皆に生暖かい目で見つめられてしまった。

「安心してください、私達はそのために来ました。まずは落ち着くために、お互い自己紹介をしましょう」

優しくリノアが語りかけて、千裕を落ち着かせる。その少女の目を見ていると、なぜか逆らえなくなり、千尋はおとなしくすることにした。

「私はリノア」エ　いえ、ただのリノアです。ですから、リノアと呼んでください」

「私はマグナリス」エリナク。私はマグナでいいぞ」

マグナは自分が名乗った後に、お嬢も名乗っておけと視線を竜に送る。

「ん？ ワシか。ワシは“霸王竜”アルベリアだ。アルと呼んでくれ」

そして最後は千裕に視線が集まる。その視線に気おされて素直に名乗った。

「俺は、天宮千裕だ……」

「アマミヤチヒロさん　チヒロがお名前ですらいいですね？」

ファーストネームが名前であるであろうこの地で、後者が名前だ

とすぐに思い立ったりリノアの言葉に驚いた。

「なに、それほど驚くことでもないさ。なぜならチヒロお前が来る以前に来た異邦人が、チヒロと同じ世界の住人なのだからな」  
「なっ」

想像外のことを言われ驚いた。この世界に来たのが自分以外にもいると言うのだ。

「ノガミサクラと言う名の御仁で、チヒロさんの世界の知識も多々お教えしてもらいました」

ノガミサクラ。明らかに日本人特有の名前。同じ境遇の仲間がいることに嬉しくなった

「そして同時に、お嬢の花嫁を見つけると言って帰っていったのもヤツなだけだな」

が、手ひどく裏切られた気分になった。

そんなコロコロと表情を変えるに千裕の顔を見て、やりと笑うマダナ。アルもまたうんうんとうなずく。

何が言いたいと視線で睨んでおくが、効果は無い。

「ですが、戸惑うことは無いのです。チヒロさんが望む答えは私達が持っていますので、どうか落ち着いて話しを聞いてください」

「！ それは、もとの世界に帰る術も ！？」

「それは、少し込み入った話になります」

どこか苦々しく笑うリノア。その視線の先にはアルの姿。

「ふん、別に全てを話せばいいだろ」

「ありがとうございます。では、少々場所を変えましょう。いつまでも外で立ち話と言うのも」

「私が辛いです。と、後半は小声で訴える。

「くくっ、この場を辛いと感じるか。ならばワシの実力もついにリノアを超えたというわけだな」

「悔しいですがそのようですね。転送も貴方の縄張りであるこの山の中まで出来ませんでしたし」

だが、リノアの表情は悔しいというより、どこか我が子の成長を

喜ぶような母親みたいな表情だった。

「チヒ口を連れて行くのならワシもついて行くぞ」

「おいおい、お嬢が街に入れば、それだけで街は滅びるっつーの」  
「ふん。そんなことわかってる」

そう言つと、アルはひと吼え。するとその竜の姿がまばゆい光を放ち、一瞬のうちに一人の人の姿になつていた。

腰まで無造作に伸ばす白銀の髪はとても美しく、千裕の右目と同じ黄金の竜眼を両目に持つていた。その瞳が見せる表情はとても蠱惑的で、顔だけ見れば世の男どころか女でさえも魅了しかねない美しい顔立ちだが、残念ながら体つきがリノアと同じ幼女体型。

「っーか、服着ろよ」

でも、いくら幼女体型でも、女性の裸体をガン見するのはいささか気が引けるため、千裕は明後日のほうに視線をそらした。

「先ほどから何も着ていなかっただろう。何を今さら動揺する」

確かに銀の鱗を纏つていたとは言え、ソレも含めて生身と言つたら、確かに何も着ていないことになるが。ソレとコレはまったく違うと言いたい。

「アルベリアさん、人の殿方にはいろいろと思うところがあるのですよ。それより私たちを神殿まで転送していただけませんか？ 私力はこの山では使えませんから」

リノアの言葉にふふん、と鼻を膨らませる。リノアに優っていることがとても嬉しそうだった。

「場所は覚えていますか？」

「問題ない。飛ぶぞ」

パチンとアルが指を鳴らした瞬間、千裕はまるでこの世界に来た時に感じた浮遊感を感じた。だが、それは一瞬のことで、直ぐに地面に足がつく感触。

「っお………！」

千裕が見たその場所は、とても広い真っ白な空間。まるで教会の聖堂を思わせるような場所であるが、あまりにも広く、そして物が

何も無い。

それに、つい最近に出来上がったと感じさせるほどに真新しく、つまりはそれほどまで完璧に掃除がいきとどいていた状態だった。「ふん、相変わらず狭いな。これで竜の巣と呼ぶのだから人間の器もたかが知れている」

驚く千裕とは対照的に、ガツカリとした声を出すアル。

「人間からすれば十分過ぎる大きさなんだよ」

「だが、この程度ならワシの掘った巣穴の方がよほど巨大で快適だから住むのならワシの方がいいぞとアピールするアルには悪いが、人間的感性を持つ千裕としてはこっちの方に魅力を感じてしまう。」

「さて、アルベリアさんはあちらで着替えを。マグナ、手伝ってあげてください」

「りょーかい」

「そしてチヒロさんはこちらで私とお話しを」

「わかった」

「おい！ ワシの花嫁を勝手にたぶらかすんじゃないぞ　！」

「いいから、お嬢はこっちだ」

引きずられるように部屋へ入るアルとマグナ。そして千裕とリノアも別の部屋へ入る。

そこは、先ほどの場所とはうって変わって、どこか生活感がありとても落ち着ける場所。どうやら談話室のようだ。

リノアの勧めでソファに腰掛、対面にリノアが座る。

「さて、チヒロさん。貴方の身に起きた出来事を語る上で、まずこの国の成り立ちを話しておかなくてはなりません。ですから、どうか少々長くなる昔話ですが、ご拝聴をお願いします」

リノアの言葉に首を縦にふると、紡がれる本当に少々長い昔話しに没頭することにした。

その昔話をかいつまんで話せばこうだ。

エルミユシア王国の成り立ち 約千年ほど昔のから始まる出来事。

とある一団を率いる一人の人物と、その人物が目を付けた土地に住む一匹の竜。そして、いつの間にか加わっていた一人の異邦人の開拓史。

一団を率いる人物は、国を創るため竜に助力を頼み、竜はその人物に恋をし、異邦人はその光景を楽しんだ。

竜に見初められた人物はやがてこの国の初代王となり、竜はこの国全土を守る守護竜と化す。異邦人は さて、何をする？

「王に知識を与え、竜に力を与えた だな」

着替え終ったってやって来たアルが補足に入る。なぜか当然のように千裕の隣で座りながら。

王は異界の知識で他国と渡り合える力を持ち、竜には“霸王”として誰も寄せ付けることの無い無類の力を得たと言っ。

「なあ、その異邦人っていうのはノガミサクラって人だろ？ 一体何者なんだ？」

ただの日本人がそんな知識はともかく、竜に与えられる力を持っているはずが無い。それとももしかしたら、この世界に来て力を付けた？

「ふふん、あやつがヒトだと？ たしかに元々はそうだったのだから、実際はそんなかわいらしいものではないぞ」

なあ、とアルはリノアに視線を向ける。

「ええ、そうですね。チヒロさんが聞けば笑ってしまうような存在

です」

今だって笑える状況なのに、これ以上に笑うのか？

「だってあの方は、マホウツカイなのですから」

リノアが口にした言葉に一瞬、千裕の時間が止まった気がした。

「えーっと、それって、こっちの世界でそうなった、とかいう話し  
？」

「まさか。こちらの世界に来た時からあやつはマホウツカイだった  
よ」

「ソレってつまり、俺のいた世界でマホウツカイをやっていた、っ  
てこと？」

「さて、あやつは“界渡り”ができたからな。時代や世界など関係  
なく存在できるやつだ。どこで“生った”かなど皆目検討もつかん」

アルが分からないというのだから、これ以上深くつつこんだところ  
でどうしようもないと判断し、千裕は話しを元に戻すことにした。

「で、結局その歴史がどう関係しているんだ？」

「いえ、この後にもう少し続のお話しが関係あるのです」

そしてリノアは再び歴史を語る。

初代王の命により、竜が人々の下へ帰ってこれるよう、この竜都  
『ヴァラノワシル』と降竜殿を建設。

王と竜との間に子が生まれる。

長き平穩の時。

時代は流れ、初代王は死に、竜が愛した人物が消えたのと同時に  
竜も姿を消す。

そして勃発する他国との戦争。

現れる“霸王”の称号を持つ新たな竜。戦争は終結する。

だが、その“霸王竜”は他国の“勇者”によって討ち取られ  
た。それは約四百年ほど昔のこと。

「そして、その討ち取られた先代の“霸王竜”はワシの親であり、お主が持つ右目の持ち主　らしい」

「らしい？」

なぜか自信なさげに言うアル。

それをリノアは補足してくれた。

「ええ、先代の“霸王竜”の死は、ノガミサクラさんから聞き及んだことで、そしてアルベリアさんはまだ　」

異邦人はまだ生まれる前の竜の卵と、“霸王竜”が死した証として右目を持ち帰る。そのことを知るのはリノアとマグナの二人だけ。エルミュシア現王ですら知らないこと。なぜなら、そのことが知れ渡れば再び戦争になるのだから。

卵はリノア達に預けられ秘密裏に育てられる。

その卵からアルベリアが生まれるのを見届けた後、異邦人は一つの約束をして自分の世界へと帰っていった。

それは、異邦人の伝承に記される竜の花嫁の話し。人々から恐れられ、生贄を求める竜と、捧げられる何よりも美しい人の娘の物語。

いつの日か、アルベリアがその伝承のように、人々から花嫁を捧げられるような強き竜となるように願う

「で、結果俺が捧げられた　？」

「有体に言えば。ですが、この国の根幹を成すことのため、無碍にもできず」

リノアの一言に、千裕は顔を覆い天を仰ぐ。

「ワシはあやつ約束通り力を付けた。そしてコレから　というところでお主が現れた。ワシの直感も間違いないと言っている。さ



あ、コレからワシと共に暮らそう」

「いやいやいやいや」

いくら今の外見が人の姿だからと言って、その正体は山のごとき竜であるため拒絶感がどうしても出てしまう。やはり人の身である千裕としては、人の女性を求めるのは自然なところ。

「えーつと、ほら、肝心なこと聞いてない。俺、元の世界に帰れるんだよね？」

「まあ、確かに方法はありません　ですが一つ聞きたいのですが、チヒロさんは本当に帰りたいたいのですか？」

「え？」

リノアの言葉の真意がつかめず千裕は困惑した。千裕自身は、アールには悪いが、わけも分からずこんな場所に放り出されあげく嫁になれと言われても不可能だ。

「いえ、チヒロさんがこの世界から去りたい理由としまして、ただ単純に望郷と不安からではないかと思ひまして」

「いや、そうだけど……」

「では、もしこの世界がチヒロさんにとって何も不安なく、そして親しい地となった時、それでも自身の世界に帰りたいたいと思われませんか？」

その質問に千裕は言葉を詰まらせた。

たしかに、今ここで帰りたいと願う理由は、今までなんの疑問も持たずに暮らせてこれた、安心できる自分の世界だと認識しているから。そして親しい家族や友人が居るから。

だが、この世界でも安心して暮らすことができ、もし、仮にも目の前の少女や隣の竜が千裕にとって親しい存在となった時、果たして、それでも帰ることを望むだろうか。

答えを出せないでいる千裕を見を、リノアは優しく微笑む。

「今は答えを出せなくてもかまいません。ですがいつかは出さなくてはいけないときが来るかもしれないのですから」

「それは　どんな、時に？」

「チヒロさんが竜眼を見つけた時と同じように、貴方自身の右目を見つけたときです」

その時は文字通り、目のが覚めるように貴方は元の世界へ戻っているでしょう。そうリノアは締めくくった。

## 歩くその街

その後、質問を失った千裕を見て、リノアは気晴らしに街を案内しますと申し出た。

千裕も気分転換にと承諾したが、それにへソを曲げたのはアルだ。彼女としてはさっさと自分の巢に戻りたかったのだが、千裕がそれを拒否したため拗ねて駄々をこねたが、結局二人の後について行くことで落ち着いた。

「さて、まずは今居る場所。この竜都『ヴァラノワシル』の中心にしてシンボルである降竜殿を案内します」

部屋を出てやはり驚かされるのは、圧倒的な白の空間だった。この空間事態が竜が降臨するべき祭壇であり、この部屋の脇にあるいくつかの部屋は、使用人たちの部屋とか、王と竜の逢瀬のためとか、いろいろ事情がある時に使うとか。

でも今は、リノアとマグナの二人だけで暮しているのだと言う。だから、これからはチヒロさんも遠慮なくココで暮らしてくだると嬉しいですとリノアが言ったら、アルがさらに拗ねた。でも、千裕に拒否されたばかりなので、どうしようもないもやもやを胸に抱えながら、とりあえずただ吼えておく。いくら人間の姿とはいえその声はバカでかく、神殿中に響き渡るほどだった。

それをリノアはしょうがないですね、とただ苦笑し、千裕はどうすればいいのか困っていた。

「ふん、いいさいいさ。まだチヒロは人としての生活を忘れられないでいるだけだ。いつかはワシと一緒に暮らす気にさせてやる」

「そうですね。がんばってください」

無責任に応援するリノアに、あんたはどっちの味方だと千裕はジト目の視線を送る。だが、当然華麗にスルー。

「まずは、先ほど伝承でも話したとおり、ここは初代“霸王竜”の

ための神殿なのですが」

「ふん。こんな場所、初代の存在が伝承通りなら、入りきるはずが無いだろう」

「ですね。聞いた話では三千年以上を生きた竜だと言われています。その大きさは鳥一つを凌駕する大きさだとか」

「だな。三千年前と言えばラグノ・プリング法樹の根道の時代だ。あのころは空にとどくほどのデカイ生き物がうじゃうじゃいたと聞くから、初代もそのご多分に漏れなかったのだろう」

また、千裕には分からない用語が出てきたが、今はただ、あのアルよりデカイ生き物がうじゃうじゃいる時があったのかと、その話しだけに驚いていた。

「そのため、人に創ることが出来る限界がここまでだったのでしょう。それにあわせて、初代“霸王竜”は人の姿では何度も訪れたと聞きます」

リノアの言葉に、なにやら腹に据えかねたアルは、ふん、と大きく鼻をならす。やはり、リノアは苦笑するだけだった。

昔話となると、やはり蚊帳の外になってしまう千裕は、一人きよるきよると辺りを見回す。

本当にただ真っ白で何も無い場所。清潔と神聖しか存在しないのかと思わせる光景に、今でも尚“霸王竜”と呼ぶ存在が、人々にとってどれだけ敬意を払い信仰の対象となっているか、想像に違わぬものだろうと考える。

「チヒロ、なにかめずらしいものでもあつたか？」

觀賞に浸っていると、アルは不思議そうに声をかけてきた。

「いや、この場所、凄く綺麗だなんて思ってた」

「ふふつ、そのことはマグナに伝えてあげてください。この神殿の管理は彼女一人で行っているのですから」

その言葉に信じられないと言う顔をする千裕。

見た目のずばらな印象をもさることながら、これだけの広さのものを一人で管理するなど物理的に無理なはずだ。

「正確にはマグナではなく、ヤツが使役する妖精だ。あの女、伊達に“時の魔女”などという二つ名をもっているわけではなくてな」  
あと、“聖医”という称号もありましたねとリノアが付け足す。

「この神殿の掃除や点検は、すべて自分の配下の妖精どもにやらせて、自身は妖精には出来ないことをやっているだけだ。だから、この光景もすべて妖精の手柄だ」

敬意や信仰心はまったく関係なかった。千裕は自分の見る目のなさに「あっそ」と呆れながらつぶやく。

だが、こんどは妖精という存在に興味がわいてくる。

「この世界では妖精は当たり前にいるのか？」

「いる。しかし、ワシらと妖精達は互いに干渉できない立場にある」

「でもさつき、妖精達が　って言ってたよな？」

「そこが、マグナが“時の魔女”と呼ばれる由縁だな」

いまいち説明になっていないが、あれこれいっぺんに説明されても、理解できる自信がなかった。今はそーゆーものなんだなと千裕は自分を納得させておいた。

「では、そろそろ外を見て回りましょうか」

リノアの言葉に、千裕は頷く。やはりここは、ファンタジーのお約束である中世ヨーロッパ風の街並みなのだろうか、などと冷めた考えをしていると、

「さて、ワシがいた頃からどれだけ変わっているか、楽しみだな」  
意外にも、アルの方が街へ出ることを楽しみにしていたのであった。

街に出た千裕が目にした光景は、予想したお約束のファンタジーとは違ったものだった。いや、たしかに想像通り、石畳の道にレンガと木の家　といった光景もあったが、街の一部、特に南西側は、中世どころかまるで産業革命期のような風景があった。

鉄筋のマンションがいくつか立ち並び、白煙を吹き上げる工場が

存在し、千裕から見れば古臭い型だが、車も数が少ないながら道を走っていた（リノアも所持しているらしい）。

驚く千裕とは裏腹に、アルが冷めたような声で「退化したな」とコメントする。

リノア曰く、異邦人の知識で他国には無い技術革新が一時期は進んだが、資料は戦争で焼かれ、異邦人はいなくなり、何代か前の王がその技術を隠匿するようになった結果、次第に異界の技術知識を持つ人間は減り、マンションを建てられるような建築士はいなくなり、車はアンティークとなり、今では毛織物工場と食品加工工場ぐらいしかまともに機能していない。しかも、その工場も設備を整備できる人間の数が少ないとのことなので、その整備士が倒れたら王都から人を呼ばない限り終わりだと言う。

なんだか自分のいた世界と大して変わらないのかなと千裕は考えていたが、そこはやはりファンタジー。機械には、人の知識と技術だけでなく魔術という、千裕から見れば異端の技術も組み込まれていることを聞いて、どこかほっとしたような、苦笑せざるおえないというか、そんな複雑な気分させられた。そして同時に、そのあたりのレクチャーも受けなければならぬのかと、ちよつとめんどくさい気分になる。

そして神殿から東へ程なく歩いたところで、ここが街の顔である商店通りです、とリノアが案内してくれた。

たくさんの店や露天が立ち並ぶその場所は、想像以上人の活気であふれていた。

「なんかすごく賑わっているけど、祭りか何かか？」

「ええ、そうですね。ある意味お祭り　といえるかもしれませんが、何せ、四百年ぶりに竜の存在を人々が目にしたのでですから」

「ああ、そうだったな　いや、それだと……おい、リノア。この国は今どのような情勢だ？」

「大丈夫ですよ。確かに明日か明後日ぐらいには王都から使者がいらっしゃると思いますが、私の予想できる範囲であるならアルベリ

アさんが懸念することはまずありません」

「当然だ。いきなりワシの力を借せなどと言って来たら、問答無用で焼き払ってチヒロと共にどこかへ飛び立っている」

「そのようなこと言い出すのなら、それ以前に、わたしとマグナが許しませんよ」

「ふっ、すでに半ば見限り、ここに引きこもっているお前たちが？」

バカにする様に鼻で笑うアルと、何時もの余裕のある笑みではなくどこか暗い笑みを見せるリノア。

相変わらず仲の悪い空気を漂わせる二人だが、千裕はそのやり取りを見ながら別のことを考えていた。

この国は昔、竜が不在になったことで戦争が起きた。そしてその火種はまだあると見受けられる、とリノアから説明された。

だったらこの国にアルベリアという本物の“竜”の存在が確認された今、その力を借りて他国へ という選択肢もあるのだ。

戦争。

日本で平穩に暮らしていた千裕には、聞きかじった言葉で、曖昧にしか理解することしかできない出来事。

「安心しろチヒロ。もしどのようなことがあつたとしても、ワシが全力で守る。というより、お主もタダの軍隊程度なら一人で蹴散らせるだろうが」

「いやいや、俺、普通の人間だよ!？」

普通の人間に、そんなゲームの無双キャラのような真似できるはずが無い。

「何を言っている。お主は竜眼を持つ存在。それが普通であるわけがないだろう。ワシと同等 とは言わぬが、その半分程度の力なら持っている。そしてその力は人間程度に負けるものではない」

まあ、先代を殺したような“勇者”や、戦場の覇者である“英雄”には通じないだろうがな、と付け加える。が、千裕は思わぬ事態に、少々動揺してしまう。

「で、でもそんな感じ、まったくくないんだけど」

「今は人間の理に引きずられて自覚が無いだけだ。なに、ワシと共に暮していれば次第にその力を自覚するだろう」

にわかに信じられない言葉に、ただ目を丸くするしかない。

だが同時に、自分がマンガのようなキャラになれることに心踊るものがあった。

もし、自分の立場が、時々酷い中二病をこじらせる姉であつたらどうだったか。少し想像したら、思わず吹き出していた。

「どうした？ いきなり笑って」

「何か面白いものでもありましたか？」

不思議そうに見る二人に、千裕はなんでもないと手を振って答える。

そして再びリノアの案内であちこちと見て回っていると、住人達がリノアに気がつく。「巫女様」「巫女さま」と話し掛けてきて、次第にリノアの周りは人だかりとなっていた。

主人々が口にする話題は北の山に現れた竜のこと。リノアは声をかけてくる人たち一人一人に笑みを見せて言葉を交わしていく。

当然そうなれば、千裕とアルは次第に蚊帳の外へ追い出されていった結果、二人は人ごみの外からその様子を眺めることになった。

「なんか、凄く人気あるね？」

「ああ、リノアは“竜の巫女”でありこの街の代表であり領主だからな」

「領主」

「ワシがいた山も含めてここら一带はリノアの領地だ」

「あんな見た目な子が領主ねえ。よほど善政を布いているか見た目にだまされているのか」

領主と言うのは、税の取立てや無茶な法の立ち上げなどで、嫌われ役になるというイメージがある。

千裕の言葉にアルがぶふつと笑った。

「リノアとマグナが共に無駄に長い時間を生きていることを民達は知っているよ。まあ確かに、ただの人間の領主では出来ないことを



やっているという　という点でを上げれば善政と言えるだろう。  
そういった意味では、今まで姿を見せなかった竜リオンよりも崇められて  
いる存在だな」

なにやら意地の悪い笑みを見せるアル。

千裕は詳しく聞いていないが、リノアもマグナと同様アルが生ま  
れる前より生きていた存在だ。

今はまだ、いろいろとこの世界に対して知らなければならぬこ  
とが多すぎるためその辺りは後回しにしているが、いつかは彼女達  
の出生も聞いてみたいところだなと思った。

「それではすみません。今日はこちらの旅の方達をご案内して  
おりますので」

街の人たちに頭を下げながらリノアは話しを打ち切った。

そして、そそくさと逃げるように人ごみから遠ざかったところで

「ふむ、旅の方達　と」

アルが皮肉っぽく言う。

「まさか、本当のことを言えるわけもないでしょう」

「ワシは別に構わんが？」

挑発じみたアルの言葉に、はいはいと軽く受け流す。

さて、次はどこを見て回るのかと思っていた千裕にだったが、リ  
ノアはすみませんと謝ってきた。

「街をじっくり見て回るのはまた次の機会にお願いします。今日は、  
チヒロさんの世界には無い施設を紹介しておきたいので」

「俺の世界には無い施設？」

「はい、次に案内するのは冒険者ギルドと申します」

冒険者ギルド　その名前は聞いた瞬間、いよいよもってファ  
ンタジー感が出てきたなと、施設の内容を千裕が想像していたら、  
「なんだ、あの乞食連中まだ生きていたのか」

呆れた声でアルが言う。その率直な意見にリノアが苦笑い。

「まあ、アルベリアさんが街にいたころは、確かにそのように言わ

れても仕方がない集団だったんですけどね」

「仕方がないもなにも、力自慢のいい大人が、大言壮語ばかり吐いてわ日銭を稼ぐ程度のやつ等ばかりで、ワシが知る中での本物の冒険者など両手で数える程度だったぞ」

「ですが、昨今ではアルベリアさんが言う、本物の冒険者が多数いるのですよ」

「なに？ どういうことだ」

予想外の言葉だったのか、アルは目を丸くする。

「約五十年ほど昔になるのですが、西方の大陸に広がっていた“死<sup>デ</sup>界の霧”が突如晴れたのですから」

「なっ！？ あの霧がか！」

「ええ。ですから今の時代で冒険者というのは、何でも屋であると同時に未知の地を開拓する先駆者であるため、国にとっては必要な職種なのです」

と、後半の言葉は千裕に向けたもの。多少専門用語を出したが、要はこの世界には冒険者がいるのだと、リノアは伝えたかったのだ。「でも、そんなこと話すなんて、俺と何か関係あるのか？」

「んー、チヒロさんに　というよりも、お二人に、関係がありませんね」

「「???」」

千裕だけでなく、アルも関係があると言われ、二人は同じタイミングで首をひねった。

「その辺りの事情はおいおい話していきますが、今現在において注意していただきたい点は、冒険者の中には幻獣　つまり、竜種を相手にする冒険者もいます。お二人が何も知らないまま、冒険者の方が口にした言葉に反応して、いざこざに発展はしてはほしくないからです」

リノアの言葉に、千裕は、ああ、と思わず納得してしまふ。

自分とはかく、隣で「冒険者程度に負けるものかよ」とアップを始めているアルの目が、どこか獲物を狙うように輝いているのを

見て、何も起こらなければいいなーと考える千裕だった。

とりあえず、騒ぎになるようなことは控えてくださいね、と、あまり意味の無さそうなクギをアルにさすりノアだった。

## そういえば、この世界に来てからまだ一日目

その後、歩きながら冒険者ギルドの話しを聞けば、だいたい千裕が予想していたような場所だった。

ギルドへ登録すれば、与えられたランクに応じての仕事のを貰い、達成した暁には報酬を貰う。要約すればそんなところ。

基本的な仕事は街の住人からの困りごとなどだが、昨今では、国からの依頼や大陸を渡るような大仕事も扱うのだと言う（ただし、当然ランクが高くないと受けられないが）。

これらの運営は『ギルド協会』という、国とは別の、全てにおいて中立を掲げる組織が行っているため、下手にたて突けば国ですら庇いきれない事態になることもあるらしい。

なぜそのような場所を案内するのかと聞くと、リノアが、「私の世話になるばかりなのは嫌でしょ？」

とアルに問いかければ、即答で「ああ」との言葉が出た。

そして、千裕には、

「チヒロさんはこの街で暮らしたいんですよね？」

と問われ、アルとあの山の中で暮らすのと人の住む街で暮らすとどちらがいいかと考えると、やはり後者を取ってしまうため、素直に「ああ」と答える。

するとリノアは、

「チヒロさんがこの街で暮らすのならば、アルベリアさんもこの街に滞在するのではよ？」

「当然、大切な花嫁を一人に出来るわけが無いだろう」

千裕はいつまで花嫁ネタを引っ張るんだろうかと思っただが、一生引っ張られる気がするなとも思っていた。

あと、俺のことが心配なんじゃなくて自分が寂しいから一緒にいることに拘るんじゃないか？ と、うすうす思い始めたが、それを

アルに直接聞く勇氣は千裕には無かった。

「ですから、住む場所は提供しますが、生活費はお二人で稼いでください」

働かざる者食うべからずという、至極もつともな意見を出された。そしてその働き場として冒険者ギルドを提案すると言う。

そこにあるリノアの思惑としては、近年冒険者が街の外へ出払うことが多くなってしまったため、街の中で求められる雑用系の消化率が低くなったことへの解決策も含まれていると、正直に千裕達に教えた。

たしかに竜の手にかかれば、人間の困りごとなど大概は簡単に解決できる。そんな簡単なことで千裕達は金を手にでき、住人の不満は解消でき、街が安泰できればリノアも助かる。

一石三鳥でしょ？ とにこやかに言うリノアに、見た目とは裏腹にちやつかりしているんだなと千裕は思った。

「さて、ここがこの街にあるギルドです」

商店通りの裏道にある、怪しい店が建ち並ぶ通りの一角あった。

その建物の中からは、外に聞こえるほどに騒がしい声が聞こえる。ここでも、今日みた竜の話しでもちきりのようだ。

リノアを先頭に、軋む扉を開けながら中へと入る。

見慣れない二人を引き連れた領主に驚きの視線を向ける者、まったく気にせず話しを続ける者、千裕とアルを見て馬鹿にしたような表情を見せる者、さまざまな反応があった。

「あれ、巫女様！？ いったいどうしたんですか、こんなゴロツキの巣窟に足を伸ばすなんて」

カウンターに座っていた青年があまりの珍客に、驚きながらもその真意を探ろうあちこちと視線を動かすのが見て取れた。

「すみません、ギルドマスターにお取次ぎ願えますか？」

一切の説明もなく、笑顔で押し切るリノア。

「はあ、いいですけど……」

と、青年の視線は千裕とアルを見る。

「説明は後でギルドマスターからお聞きください。今は」

「はいはい、わかりました。巫女様がやって来た時は大体ろくな事がないとマスターもぼやいてましたからね。深入りはしません」

そう言つて、めんどくさそうな表情を見せる青年は奥の部屋へ消えたが、残されたリノアは「ろくな事がないとは心外ですね」とちよつと膨れ面。

「お前も依頼をだすのか？」

「ええ、西大陸の情報は、ギルドが一番早いですから」

「西大陸か……俺の目もそっちにあつたらどうしよう」

「大丈夫ですよ」

不安そうにつぶやく千裕に、リノアは言う。

どんな根拠があつてそのようなことを言うのかと思つたら。

「この世全ては必然です。貴方がその目を手に入れたことも、そして自身の目を手に入れることも」

言われたことの意味がわからず首をひねると、その言葉をフオロ―するようにアルが言う。

「つまりは、どうなるかなどすでに決められているということだ。

ならばじたばたするのは馬鹿のすること」

「おいおい、そんなことは……」

「そんなこと？ あまり馬鹿にするものでもないぞ。ワシの花嫁に選ばれたことも“運命”なのだから」

（いや、まだ決まっていけない……でも、このまま一生見つからなかったら、その可能性もありそうだし）

なんだかんだと言つて、千裕は目の前の竜のことを嫌っているわけではない。だったら一生一人で当てる無い目を探すよりはと考へてしまつた。

「しかし、この世には“運命”を司る力がある。故に、その力を扱う者がお主に味方をすれば、お主はなんの苦労もせずに自身の目を見つけられるだろう」

「“運命”を扱つて……」

「信じられんか？ まあ全て、努力と才能の範囲でしか考えられん人間の思考では余る話しだからな」

「……………」

「とにかく、今は何も心配するな。この世全ては“有る”か“無い”かの二択だ、だったらお前が信じる限りお前の目は近くに“有る”」

そう締めくくると、なんでワシがフォローせにやならんのだ、とふて腐れながらそっぽを向く。

「アル……………」

お前は何か知っているのか？ そう聞こうとした千裕だったが、「ふおつふおつふお、獣人のお嬢さん。そなたは魔法に関して造詣が深そうじゃのお」

いつのまにかカウンターに現れた老人に驚き、言葉を飲み込む。

「……………まあな」

獣人という言葉に顔をしかめながらも、アルは簡潔に頷いた。

「お忙しいところ申し訳ありませんギルドマスター。少々貴方にお願ひがあります、ここへ足を運ばせてもらいました」

「ほほっ、リノア様じきじきにですか。それは後ろにいらっしやる獣人のお二方のことですか？」

「そうです。彼らを登録したいのです」

「それは、試験抜きで、ということですか？」

「はい」

リノアの言葉に、ギルド内がざわつと反応する。その瞬間から、ギルドの冒険者達の視線が一齐に千裕とアルに集まる。その視線の種類はさまざまだが、その大半は嫉妬や妬み。そして、言葉の端々に獣人という単語が混ぜられている。

千裕は事情が飲み込めず戸惑い、アルは不思議に思った。

アルが知るころのギルドは、氏名を記入するだけで登録可能であったのだが、現在のギルドはそこそこに厳しい試験を行わなくてはならなくなっていた。

これは、西大陸で一攫千金をもくろみ、こちらの大陸と同じノリでむかつた冒険者の多くが、まったく違った環境と敵の存在に命を落とす結果となったからだ。

「なんか、思いつきり反感を買ってるんだが……」

思わぬ事態に、千裕は隣にいるアルに耳打ちをした。

「気にするな、結局冒険者の質は昔と変わっていないと言っただけだ」  
千裕としては、その昔をしらないからどうすればいいのに対応がよく分からない。ついでに、アルが不機嫌なものなんか気になる。  
「ワシらのことを獣人だと抜かしているのだ。不機嫌にならない理由が無い」

「その獣人って、俺のことも含まれているんだよな？　なんだそれ？」

言葉のニュアンスからなんとなく想像は出来るが、この世界での立ち位置的なところで言うかどうかなのが気になる。

「人に作られた人だ。お主のところでは『遺伝子改造』と言っのか？　ワシらの目を見てそう思ったのだろう」

千裕とアルが二人でぼそぼそ言葉を交わしている間にも、リノアとギルドマスターのやり取りは進み、二枚の用紙にリノアが書き込んでいる。

そしてその書き込みが終わると、ギルドマスターは二枚の紙に目を通す。

「チヒロ！アママミヤと、アルベリアか。よかるう、これから二人をギルドの一員として迎え入れよう」

老人がそう宣言した瞬間、今度は本当に多くの冒険者達から直接二人に向かって声が上がった。当然千裕とアルに対する反対意見だ。だが、ギルドマスターが認めた以上何が出来るわけでもなく、ただ文句だけが出るだけだった。

「いいのかりノア。公平を重んじるお前が、このような状況にしてしまっって」

どこか楽しそうに言うアル。



「かまいません。むしろ試験の際に貴方達の正体が発覚するほうが問題です」

ギルドでどのような試験を行うか千裕はしらないが、実際の試験内容はサバイバルテストと魔力検査の二種類。

サバイバルテストは、竜という規格外の存在のためまったく問題ないのだが、問題は魔力検査。

魔術師としての適正があるかの検査なのだが、これは検査器で計る。そして、当然その検査器は人間用に調整されている物のため、アルが計れば一発で人外の判定が下る。千裕ですら伝説上の人物クラスの魔力を保持している。

そうなれば、千裕にとってもアルにとってもリノアにとっても望まない結果になることは目に見えている。

「おい、巫女様！ 俺たちは厳しい試験を超えてここに居るんだ！ そんな役にたたなそうな子供を登録させるとは、どういってもりなんだ！」

ついに不満が爆発した一人の男が立ち上がり、リノアに向かって食って掛かる。

「それについては問題ありません。私が彼らはこのギルドに在籍するに当たる実力者だと判断しましたので」

「はあ？ そいつら獣人だろ！？ そんなのを野放しにしているのかよ！」

リノアのお墨付きが効いたのか、男は論点を摩り替えてきたが、そのすり替えはアルにとってダウトだった。

明らかに引きつっているその顔は、「見せられないよ！」と書かれた看板で隠したいところだ、などと馬鹿な考えが浮かぶほど。

「ですからそれも」

「よい、リノア。下がれ」

リノアと男の間に割ってはいるアル。

「キサマ、ギルドの掟を知っているか？」

「はあ？ 何言ってるやがる!？」

「確か絶対的なものが幾つかあったな。その中でも、ワシが今でも覚えているのが一つある。たしか弱者は強者に服従　　だったか？」  
「そんなの絶対ないだろ。と言いたい千裕だが、  
「だからテメーが従えよ！　　女子供だからと思ってチョーシ乗るなよ！」

「ええ、本当にあるの!？」

思わず驚く千裕に、リノアが「あれは曲解したものです」と耳打ちしてくれた。

「調子に乗っているのはキサマだ。弱者」

その挑発に男の怒りが頂点に達し、胸倉をつかもうとした瞬間、アルの目が笑う。

どん、と男が尻餅をつく音だけがギルド内に響く。そう、一瞬の間に誰もが言葉を失っていたのだ。

だが、その言葉を失った理由を理解できた存在は数少ない。

(なんつープレッシャーだ……今の、アルのだよな?)

放たれた力の正体に、嫌な汗を流しながら千裕は思う。

しかし、千裕は今どれだけ自分が特別な位置にいるか気がついていなかった。

目の前の男、今は尻餅をついて間抜けな姿を晒しているが、冒険者を名乗るだけの実力はもっている。それこそ外で魔獣と闘えるほどの実力を。

だが、アルのプレッシャーをさほど変わらない位置で浴びながら、その男は尻餅をつき、千裕は立っていられる。そもそも、今のプレッシャーを放った存在の正体に気がつけたのは、この場では千裕とリノアとギルドマスターぐらい。

この決定的な差異に、冒険者達は千裕とアルの存在を同時に認める結果となった。

「さて、ここでの用事は無くなっただろ。帰るぞ」

興味を失ったとばかりにアルはギルドの扉に手をかけ帰ろうとする。その後ろからリノアが小声で「やりすぎです」と言葉をかける。

だが、「気絶させなかつただけありがたいと思え」と返す。

しばし呆然としていた千裕はあわてて二人を追いかける。

「また来ますね」

と、最後にギルドマスターに愛想笑い見せて扉を閉めた。

外に出た千裕の耳に、「また来なさい」とギルドマスターの優しい声を聞いて、胸のどこかで、ここにはもう来れないんじゃないだろうか、と考えていたもやもやが晴れた気がした。

「さて、これで今日の用事はなくなった。さっさと帰ってごろごろしたいぞ」

「アルベリアさん、あなた……」

と、リノアが何かを言いかけたところで、三人は思わず立ち止まった。

身長が二メートル以上にもなる大男が、立ちほだかるように立っていたのだ。

「……なんだお前」

アルの言葉に、男がじろりとなめる様に千裕とアルを見て

「お前か？ 先ほどの闘気は」

アルに問いかけた。

その言葉に、一瞬沈黙が降りたが、すぐさまアルは千裕を見た。

「ワシではなく、こやつだよ。ワシがゴロツキに絡まれそうになった時助けてくれたのだ」

堂々とその幼い容姿に見合った声色で言っただけのアルに、リノアは顔を明後日の方へ逸らす。多分笑っているのだろう。

「そうか」

納得したのか、していないのか。感情の起伏が少ない言葉で男は三人の脇を通りギルドへ入っていった。

「……なんだあやつ。人間のクセに、そこそこの力を持っているが」

「ええ、彼はギルドの上位クラスに属する人ですから」

「ほお、どうりで竜の血の匂いを付けているわけだ」

「いい！？ さっきの人、そんなにすごいのか！？」

驚く千裕にからからと笑うアル。

「安心しろ。竜といつても亜竜もじきだよ。本物が人に倒せるものか。せいぜいあやつの実力はお主と同等程度か少し下だろう」

「うっそ、俺にあの人と同じ力があるのか？」

「ある。その辺の自覚も早くもつてもらわなくてはならんな」

「そうですね。ですが、今日のところは日も落ちてきましたので、神殿へ帰りましょう」

リノアに言われて気がついた。空はいつの間にか茜色に染まり始めていた。

俺がこの世界に来る前も確か夕方だったつけど、いまさらながら思い出していた。

神殿につくところには、すっかり夜となり果てていた。当然電気などという物は存在せず、神殿内は真っ暗な闇に包まれている。

一寸先の見えない暗闇の中を、へっぴり腰で歩く千裕。アルとリノアは当然のように、明かりを必要とせず歩いている。

なぜ歩けるか理由を聞けば、リノアは神殿内のことを記憶しているとつし、アルにいたつては魔術で位置や場所が分かるらしい。

「お主も本来なら、この程度できるはずなんだがな」

といわれても、理解できないモノを直ぐに出来るはずもなく、結局空き部屋へはアルとリノアに手を引つ張られ連れて行かれた。

部屋に入り、リノアが備え付けのランタンに火を入れる。

その部屋は、やはり一面真っ白の壁で、ただベッドが一つ備え付けられただけの場所。

「ここをお好きにお使ください」

とリノアは言う。

「ではワシも」

「アルは昔使っていた部屋です」

「なっ、せっかくの新婚初夜だぞ！ 花嫁と寝ないで何をする！」

「はいはい、子供の作り方も知らない子がわがままいわないでください」

「ちよっ、勝手に子供扱いするな。それに子供の作り方くらい知っている。ワシが卵を産めばいいのだけだろう　！」

首根っこを引つ張られてフェードアウトしていく二人を千裕は呆然と眺めていたが、しばらくして千裕は考えるのはやめた。

今はこの世界に来て知った知識を整理するのが優先だ。

ベッドに横になりながら瞼を閉じる。

思った以上に疲れていたのか、柔らかでいい香りのするベッドの心地よさにまどろみながら、今日の出来事を振り返る。

金の球体ドラゴン・アイを拾ったことから始まり、異世界への召喚、竜の花嫁、巫女の領主と時の魔女、冒険者ギルドにまだまだ知らない異世界の常識

この一日で、いろいろなイベントが起きたな苦笑すると同時に、ずいぶんと遠いところへ来たものだ　などと、眠くなってきた意識の中で思う。

そして明日から、この世界でどのように暮らせばいいのか、少しだけ期待する自分がいることに笑ってしまう。

いつしか思考が夢へと落ちようとした時、千裕は枕元で聞こえるアルの声を耳にする。

それはどこか虚ろな懇願。今日一日、アルと共にいて一番似つかわしくない声色だった。

「チヒロ。お主がこの世にとどまるのなら、ワシはこのいけ好かない神殿で暮らすのも、窮屈な人の身で過ごすことも厭わない。だが、どうかワシが　」

そしてアルが最後に願った言葉はなんだったか？

確かにとどいたその言葉は、千裕の意識とともに夢の中へ沈んでいった。

こうして天宮千裕の異世界での一日が幕を閉じていく。

## 厄介ことが起こるのはお約束

「腹減った……」

目がさめて、千裕が開口一番つぶやいた言葉がそれだった。

考えてみれば、自分のいた世界で昼飯を食べたのが最後、家に帰る途中でこちらに呼び出され、その後はずっとこの世界をうろつろしただけで食事は無し。朝になって、精神的に余裕が出てきたところで、強烈な空腹感に襲われた。

リノアになにか食べるものが無いか聞いたら、

「ああ、そう言えばそうでした」

とマジボケをかましてくれた。

聞けばリノアとマグナは、水だけあれば生きていられる体らしいため、すっかり忘れていたらしい。そんな状況だったため、当然食料の備蓄もあるはずがない。

「ならばワシらで外へ行く。金をくれ」

居合わせたアルも、今は人の姿のため食事が必要だから千裕と共に食べに行く提案だ。

千裕もアルも当たり前前に手持ちが無いので当然の請求だろうが、もうちょっとオブラートに包んでもいいんじゃないかな？ と言いたい気分になる。

「そうですね。ですが、無駄使いはやめてくださいよ」

そう言いながら手を出したアルでなく千裕に渡された皮袋。ズシつとした重みに、本当にコレだけ朝食を食べるだけに必要なのか疑ってしまう。

「なあ、俺この世界の金銭の相場を知らないんだが、本当にコレだけ必要なのか？」

「いえ、食事だけでしたらその中の硬貨一枚で十分おつりが来るのですが、その他にも、身の回りに必要な生活必需品も購入してきて

ください」

その服では目立ちますよ、と今更ながらに学生服のことを指摘されてしまったが、それならそうと早く言ってくれと内心あきれる千裕。

「今日は私共についてゆけませんので、お二人で街の中を見回ってください」

「ふん、むしろ望むところだ。お前がいても邪魔にしかならん」

「それは失礼しました、ではごゆっくり」

そう言われて、千裕とアルは外へ送り出された。が、

「さて……どこへ行けばいいんだ？」

昨日案内してもらった範囲の中に食事ができるところなどは入っていない。

「ならワシが案内する」

「できるのか？ ここにいたのは昔の話だろ？」

「ワシの鼻任せれば問題ない」

「人の姿なのにな？」

「ふふん。ワシは人間の姿でもハイスペックだ」

「なら、期待しているぞ」

まかせろ、と自信満々で歩き出すアルの後ろを千裕はついていくことにしたのだが……

「おい、どーゆーことだ。生肉がないぞ生肉が」

「普通の店にそれは無いだろ」

喫茶店を見つけたのはいいが、メニューを見て、生肉が無いことにアルは「立腹」。

ちなみに最初、まだ開店前の生肉店に突撃しかけたのを見て、やはり野生の獣と言うことを思い知らされた。その時に解体中の肉を見てしまつて、千裕はしばらく肉は食えない気分になった。

「しかし、考えたら俺、メニューが読めない」

「安心しろ、ワシは料理の内容がわからん。だが、腹に入れれば何でも一緒だろう。なにせワシが山にいたころは、ある物全て生で食



べていたぐらいだからな」

それは獣特有の考えで、人間にはまったく当てはまらないんじゃないのかと千裕は言いたかった。

「まあ、オススメを頼めばいいだろう。店を出しているくらいだ。不味いモノはあるまい」

「……そうだな」

と千裕は相槌を打っておくが、その考えで姉に連れて行かれた店で地雷を踏んでいる実績があるためいまいち信用は出来ない。

「いらっしやいませ。ご注文は決まりましたか？」

にこにこ笑顔でやってくるウエイトレス。すかさず、肉を出せ、と言いかけたアルの口を千裕は手で塞ぐ。

「店のおすすめを二人分を」

「かしこまりましたー。それにしてもお二人は旅人ですか？ 珍しい服装をしています」

「ああ、北からな」

ウエイトレスとしては何気なく聞いた質問だったのだろうが、アルが答えた瞬間、千裕とアルの目に気がついたようで、ものすごく驚き、そそくさと立ち去っていつてしまった。

「なあ、あれって……」

「ワシらが獣人だと思ったのだろう。まったく、めんどくさいな」

「何でそんなに獣人は嫌われている　　というか避けられているんだ？」

「それはだな、ワシモリノアから又聞き程度に聞いた話なのだが」

「

そこから説明されたのは海を挟んだ北の大陸の話し。

豊富な資源と遺跡から発掘された古代技術を使い発展した、世界最強と謳われる帝国が所持する技術の一つ。

戦場で戦う人間を手っ取り早く強くするための手段の一つとして、人の遺伝子に獣の遺伝子を混ぜて生み出した戦士。

それが“獣人”と呼ばれる人の知能に獣の力を持たせ存在。ちな

みに、ここでアルがどれだけ竜を獣人と見るのが愚かしいか力説していたところを見ると、昨日のことは随分根に持っていたようである。

そして、獣人は過去帝国軍の戦場に何度も投入され、剣を振るう敵兵士にとっては絶対的な驚異となる。

帝国がこの大陸に侵略した際も獣人は投入され、この大陸の人間達と敵対した。そのことが、この大陸の人間に獣人に対する差別意識をもたらしていると言う。

ちなみに戦争が終結した現在において、この大陸に放たれた獣人は帝国に回収されること無く、大体がこの大陸の北にあるエルベア大森林という場所に身を潜めて、人前には姿を見せないらしい。

そのことを聞き終えた千裕は、人種差別ってどこにでもあるんだな、と思うと同時に、自分がその立場に立って複雑な気分になる。「戦争は何百年も前に終わって、被害者や加害者の当人達はとっくに臨終しているんだろ？ しかも、今は森に引きこもって出てこない相手に、なんで差別意識が風化しないんだ？」

「さて。ワシがこの街にいたころは、獣人の差別は当たり前だったからな」

だが、エルミュシア王国としては獣人に対する意識の垣根を取り消そうとしていたらしい。なぜなら、下手に獣人との対立が起きてそれが切欠で再び帝国との争いまで発展してはたまらないからだ。

「まあ、ワシが山にいた間に獣人が人里に出てきて何かしでかしたのだろう」

その考えが妥当かなと千裕も思う。後でリノアに聞いてみようと思いのうちに留めておくことにした。

「ご、ごちゅうもんの品おもちしました」

ウエイトレスはテーブルに手早く料理を並べて、すばやく立ち去っていく。

あまりに慌てていたため、入ってきた客にぶつかりそうになって頭を下げているほど。

「……いいけどさ」

ウエイトレスの態度にちよつと傷つきながら眺めていた千裕。その時、ウエイトレスがぶつかりそうになった男性客と目が合う。

「おお！ 見る、片目だけ違うぞ。獣人の血も随分薄くなつたなー」  
堂々と千裕の容姿を口にする男。隣にいた女性客はあわあわと慌てだす。

「あんだ、何言ってるんですか！？ ココで喧嘩でも始める気ですか！」

「別に本当のことじゃなーか。なーなー、にーちゃん。俺と一緒に話しようぜ！」

なれなれしく千裕達に近づいてくる男。

真つ黒な髪に真つ黒な目。さらに全身真つ黒な服で整え腰に携えている剣の鞘も真つ黒の真つ黒人（千裕命名。でも、肌は逆に白いくらいだが）。

「あいにく俺は、男にナンパされる趣味は無いんで。あんだの連れと喋ってればいいだろ」

あまりになれなれしいのと、いろいろあつて気が立っていた千裕は、思わず喧嘩腰に返事をすると、

「気にするな！ おつ、そっちのお嬢さんは両目か。見ない格好だが二人はどこから来たんだ？ やっぱり北の大森林か？」

逆に面白がつて千裕の隣に腰掛け、拳勺に料理に手を伸ばそうとする。

「あんだはちつたあ自重しろ！」

「あべし！」

女性に顔をテーブルに叩きつけられる真つ黒人。千裕もアルもとつさに皿を持ち上げ被害を回避。

「連れが迷惑をかけて申し訳ありません！」

びしつと、背筋を伸ばし頭を下げる女性。

真つ黒人とは対照的な真面目さに、こっちはこっちで絡みずらいなーと思う千裕。

「さつさと食事をして仕事に行きますよ！」

「いいじゃねーか あつ、イタイ！ 耳引つ張らないで！」

そしてそのまま真つ黒人は女性に引つ張られて別のテーブルへ行つてしまった。

「……なんだ、あの男は」

飄々としていたが、どこか底知れない得体の知れなさを感じた気がした。とか表すとかつかないかなと千裕は思う。実際のところはインパクトはあるくせに、なぜか空気のように透明でつかみ所のない不思議な印象が正直なところ。

「さてな。だが敵に回したくない類の存在だ」

いつの間にか皿の上の料理を食べ終えていたアルがポツリとつぶやく。

そう言えば、あの真つ黒人が現れた頃から今まで一言も差しやべらなかつたな、と千裕は始めて気がつく。

「アル……？」

「間違いなくアレは……いや、だが、大丈夫だワシの敵では 無い」

なにか自分に言い聞かせるようにつぶやくその姿に、千裕は真つ黒人の姿に視線を向けた。

相変わらず騒がしく、連れの女性に獣人がどうこうとはしゃぎながら言っている。

「いったいあの真つ黒人は何者なんだ？ と思いつつも、アルがさつさと食べて出るぞ、とせかしながら、千裕は料理の形も味も堪能する前に料理を胃の中に詰め込まれた。

さつさと料金を払い店を出た後も、なぜかアルの機嫌は戻らずぶすつとした顔をしていた。

獣人と言われたことに対する嫌悪感以上に、あの真つ黒人のことで不機嫌なのは明白なのだが、その理由が千裕にはわからない。

「あのさ、何を気にしているか知らないけど、理由を話さないまま不機嫌になられても困るんだが」

「……たしかにそうだな。すまなかつた。あの男とはワシ個人で後々決着を付けておくから、お主はなにも心配することはない」

「なんだか一方的に因縁を付けている気がしないでもないが、アルが機嫌を直してくれるのなら、あの真つ黒人には犠牲になつてもらうと心の中で合掌をしておく。」

「んじゃ、次は服を見たいんだがわかるか？ これは匂いではさがせないだろ」

「ああ、それなら」

当然、一軒ずつ探して回るという選択になる。

「つーか、人に聞いた方が早くないか？」

「なんだ。お主はそんなにワシと歩きたくないのか？」

「いや、歩きたくないっつーか、ロリコンに見られたくないと言っか……」

現在は人通りの少ない裏道を歩いている（実は迷子）ため、あまり人に見られる心配は無いが、アルと歩いていて実際そう見られてもおかしくないことに千裕は気がついてしまった。

「ろりこん？」

「あー、まあ、一言で小さい子が好きなやつのことだ」

「ん？ 子供が好きなのはダメなのか？」

「いや、親ならいいんだけどね？ つて、この世界じゃ、大人が子供に手を出すのは倫理的にどうなんだ？」

「その辺りは当人同士の合意なら問題ないだろう。人の子より小柄の種族と婚姻している人間の話しもよく書物に出てくるぐらいだ」

「そうなのか」

変な目で見られるのが無いことには安心するが、だからと言って千裕が幼児体型が好きかは別の話し。

「そうだとチヒロ、お主に一つ聞きたいことがある」

「なんだ？」

うむ、と一つめんどくさそうにうなずくと、

「お主は厄介ごとを見かけると、首を突っ込む性格か？」

なぜそのようなことを聞くのか、アルに問う前に気がついてしまった。

日のとどかない建物の影から、なにやらよろしくない雰囲気の中の女の声が耳に聞こえてくる。

「ちなみに女は口をふさがれて今にも攫われそうだな。男は人売りだろ、良い値がつくとか言っているのが聞こえるしな」

会話がバツチリ聞こえているアルは、千裕を見ながら、さてどうしたい？ と目で問いかけてくる。

「なあ、お前は俺に何を期待しているんだ？」

「なに、あの異邦人に聞いたのだが、お前のような人間は積極的に善行はしないが、目の前に厄介ごとが現れたらどうしても首を突っ込んでしまつと聞いていてな」

そしてもう一度千裕を試すような目で見る。

たしかに、漫画だとそのパターンは多いし、実際にも目の前で困っているのを無視するの心苦しい。だから

「ああ、お前の言つとおりだよ　！」

千裕もまた、そのご多望にもれない人種だった。

（まだこの世界での生活二日目だぞ、喫茶店といい今といい、何で立て続けにめんどくさい事態が発生するんだ！）

そんな苛立ちを抱えながら千裕は物陰へ向かって歩き出す。

「ふふつ、そうか。お前はそういう人間か。なら、ワシも困つた時は助けてくれよ」

うれしそうに腕にしがみついてくるアルの姿を見て、なぜ試されたのか納得が出来た。でも、お前は俺の助けなどいらなйдらうと突っ込みたいが、そこは乙女心というやつで納得しておく。

とにかく今は、自分に竜の力が本当にあるのか試したい気分と、胸に渦巻くいろいろなもやもやをぶつけるため、八つ当たり同然に誘拐犯をぶっ飛ばそうと千裕は心に決める。

そんな千裕の耳元でアルは「ワシもお主が困っていたら絶対助けるからな」と、安心させるように優しくお話をやいたのであった。

## いろいろ巡る縁

「おい　　って、あれ？」

千裕が物陰に顔を出した時、見た光景に思わず間抜けな声を出してしまった。

そこにいたのは、確かにスーツを着た怪しい男と、猿轡を噛まされた紫紺の色の髪を持つ少女。

しかし、男はアタツシユケースの様な鞆を抱えているだけで、少女は猿轡の他に手と足を縛られながら地面に転がっている。しかも、必死で男の足元でもがきながら男の行く手を邪魔しているように見えた。

あまりに当初の予想と違ったため、どうしていいのかわからず、ぼかーんとなる。

「ん、なんだ？　子供に見せる見世物じゃねーぞ」

「んー！　んー！」

思わぬ乱入者にめんどくさそうな顔をする男。

地面に転がった少女は好機とばかりに、千裕達を見て必死で何かを訴えかけてくる。が、

「んー！　ん？　ん！！！！」

少女がアルを見た瞬間、何か今までと違った感じで騒ぎ出す。それは八タから見るとおびえているように見えた。

「ああ……気がついたか」

ぼつりとアルは隣でつぶやく言葉が気になったが、とりあえず今は状況を一つずつ整理するため、まずは男の方の話しを聴くことにした。

「えっと、なんか売る売らないの話しが聞こえたんだけど、アンタ、人身売買の人攫いじゃない　よな？」

「おいおい、俺の顔が強面だからって犯罪者にするんじゃないよ。」



「こちらら由緒正しい金取りだっつーの」

「金、取り？」

「そう、借りたものを取り返しに来ただけだ」

「思わぬ返しに千裕の視線があっちこっちに飛ぶ。」

「具体的にはアルと縛られた少女視線を向けたら二人とも逸らしやがった。」

「この行き場の無い思いはどこにやればいいのか、完全に見失ってしまった千裕。」

「まあ、この状況じゃあ勘違いも仕方がねーけど。だけどな、このお嬢さん、約束を破った拳句に、殴る蹴るわ、手足を縛っても噛み付くわで、いい根性してるんだよ」

「んんんん！」

「何か必死で訴えている様子の少女だが、否定しないところを見ると事実らしい。」

「そうか、ならば彼女はワシらが引き取るっ」

「あきれないようにアルが少女の引き取りを申し出た。」

「率先してアルがかかわろうとすることに、思わず千裕はおや？」

「と思う。」

「おお、そうしてくれ。っーわけでコレは返済金の利子としていただいていくからな」

「んー！！！」

「喰らいつくように男にタックルを仕掛けようとしたが、アルに踏まれ止められる。」

「そして、完全にスーツの男が立ち去った後で、少女の猿轡を外してやると、」

「ちよっと！ 何しやがるのよ、このアホ竜！」

「開口一番アルに向かったの罵倒。」

「だが、千裕は思わず驚いた。今まで獣人と見間違えられていたことは数多かったが、いきなり竜と言い当てたのは彼女が初めてだったからだ。」

だが、アルは然も当然だと言うように、彼女に向かってこう言う。「ふん、半妖精が。生意気に借金などするからだ。人の世界で生きているのなら、そのルールぐらい守るのは当然だろう」

「わ、私だってそのぐらい分かってるわ！でも問答無用で『あの子』を持っていかれたのよ！」

多分この時、千裕とアルの目は本当かよ、といったまったく信用無しの目だったに違いない。

すると、確かに返済期限過ぎても借りたまま逃げてたけどさ、と小声で自白。やっぱり少女の方が悪かった。

「ふん、何をとられたかは知らんが、半妖精のお前が持っていていかれるよりはマシだったのではないか？半妖精などと言う存在が売りに出されれば、金持ち達のよい玩具になるのが目に見えているだろう」

「た、たしかにそうだけど、持っていていかれた子だって妖精なのよ！

あの子が売られたって大変なことになるだから！」

少女のその訴えは、あまりに切実で鬼気迫るものだった。

イギナと名乗った少女はに詳しい話しを聞けば　というより聞かされた。

人が暮らす世界と妖精が暮らす世界は、過去に起こった事件によって分かたれて、互いに干渉できないようになってるのが現状だが、その分かたれる事件の際に人の暮らす世界に残った妖精も居る。それがナナイナの親であり、ナナイナの連れだと言う。

ある日、二人（主にイギナ）は妖精の暮らす世界に行きたい思っていた時、この竜都『ヴァラノワシル』に妖精に詳しい魔女が居ると聞き旅に出ることにしたらしい。そしてその旅の資金を金貸し屋で借りて、長旅をして、今ここにたどり着いたのに

「って、やっぱり自業自得だろ。返す当ての無い金借りて、妖精が暮らす世界に逃げようなんて」

「ばっ、ちがつ。誰も返すつもりが無いなんて行って無いでしょ。そりゃ返さなくてすむならいいけど……」

後半明らかに小声だったが、バツチリ二人の耳に届いていた。

「大体、金策だつてちゃんと考えてるのよ！　コレさえ売れば利息付の借金なんてへでも無いんだから！」

そう言つてイギナが懐から出したのは、半壊していたが、千裕が何時も持ち歩いていた　から貰った大切な　そっくりだった。

「それ　なんでお前が！？」

「昨日空から落ちてきたのよ」

ソレは俺のだー！　と千裕は核心に至った。

「しかもコレ、魔力が無いし間違い無く“死んだ世界”の物だわ」

「　死んだ世界？」

「なるほど、それなら確かに良い値で売れるな。しかるべき場所に持っていかなければ金にならないが」

「おい、アル。ちょっと　」

せつかくめぐり合えた自分の大切な物を売られるのは困るとアルに訴えようとした時、

「あなた、もしかしてコレクター？」

千裕のリアクションに、イギナはチャンスとばかりに目を輝かせた。

「ほしいの？　今ならお安くするわよ！　具体的には五千ルピア」

多分、ソレがイギナが借金をしている金額なのだろう。千裕は小声で「どのぐらいだ？」とアルに耳打ちをする。

「大体一般人の半年分の給料に値するな」

と答えが返ってくる。

「半年って……」

それはどう考えたつて大金だった。そんな大金今すぐ出せるはずが無い　そう思った千裕だったが、

「チヒロ、金が必要なならここにある」

そう言っただけでアルが出したのはリノアから預かった皮袋の財布。

「えっ、でもそれって……」

「大体言い値と同じ金がある。もともとお主が使った予定の金だ。リノアは無駄遣いをするなといったただけだしな」

つまりは、千裕の判断しだいと言うこと。

今手元に金があり、自分の大切なものを買える。それにもともと形は違っても、女の子を助けるつもりで首を突っ込んだんだ。だったら

「……わかった、ソレを買うよ」

「マジ！ いやっほーう！ 毎度ありがとうございマース」

「ただし」

千裕との商談に成功して小躍りするイギナに待ったをかけたのはアルだった。

「な、なによ竜」

「いや、たいしたことではない。お前、連れを取り戻したら、ワシと一緒に来てもらいたい」

「ん？ なんでよ」

「なに、キサマが探している魔女を紹介できると思ってな」

多分、マグナのことを言っているのだろうが、なにやら別の目的が見え隠れ。

「だけど」

「まじで、竜！」

「ああ、本当だ。だからワシについてきて欲しいのだが」

「イクイク！ マジいっちゃう！」

……あえてノーコメントとしたい気分の千裕。

「よし、ならばまずは借金取りに金を返して来い」

「オウさ！ まってて私の大切な相棒ちゃん！」

そう言っただけで、ダッシュでイギナは駆け出した。

「ああ……いっちなだけ……借金取りの場所分かるのか？」

「問題ないだろ。あの半妖精、鼻が利くからな」

ワシの姿を見抜いたほどだ、と小さく笑った。

「アル、なんかあの子のことなんかこだわっていたけど、知り合い？」

「そうだな。あの半妖精では無いが、その親や連れれの妖精が知り合いの可能性はある」

「なに？」

「正確にはワシではなくマグナだがな。その確認のためにもアイツには付き合ってもらわなくてはならない」

「ふーん……」

いまいち分からない言葉に、今はただとりあえず相槌をうっておいた。

そして数分後、猛烈な勢いで駆けてきたイギナ。その手には男が持ち去ったアタツシユケースの様な鞆。

「やったよ、取り返せた！ ご紹介しましょう、私の相棒のリピリビよー！」

ハイテンションのイギナが、じゃじゃーんと鞆を開けると、鞆の中で丸まって眠るネコを思わせる存在。ただし、その身体はまるでフィギュアのように二頭身。

本当にうれしそうにはしゃぐイギナを見て、結果オーライと言う言葉が浮かぶ千裕。

「ふむ、それはよかったな。それではワシと共に来てくれるか？」

「イクイー！」

「もうそのネタはいいから！」

千裕のツツコミの平手が、イギナの頭に直撃した。

## 竜と勇者のいろいろあった因縁

手持ちの金は全て無くなってしまったし、余計なおまけも拾ってしまったため、千裕達は街の散策も出来ぬまま神殿に戻ることになった。

「で、お前は何を考えているんだ？」

神殿までの道の中（案内はイギナ）、はしやぎながら先頭を歩くイギナを横目に、千裕はアルに問い掛けた。

「まあ、少しな。あの女に恩を売るのもいいかもと考えただけだ」  
そう本人が言う以上、そうなのかと納得しておくことにする。

「どーしたの？ 二人とも！ ほらそこに神殿が近づいてきたわよ！」

「うひゃー！ でかい！ とはしゃぐイギナ。」

「やっとついたか」

はあ、と一息つく千裕。

なにせ、戻ると決めた後に、一度アルがずんずんと先を歩いたとき、いつのまにか神殿が遠ざかっていたことに気がついたイギナにストップをかけられたほどだからだ。

しかも、この神殿自体もデカイため、敷地から入り口までの距離もまた遠い。

「なさないな。少々遠回りしたぐらいで」

「いや、肉体的に疲れたわけではなく、精神的にな。いまさら思ったんだが、初日にやった、ワープとか使えばあつというまだったんじゃないか？」

「ふん、もともとの目的はお主と歩くことだったからな。少しぐらいは と、思っワシを笑うか？」

強がっていながらも、どこか照れたような表情をするアル。

さすがにそこでその表情をされては何もいえなくなってしまう。

「……」

「……」

「おーい、お二人さん？」

見詰め合った形になってしまったところに、イギナが声をかけてくれたことで、千裕もアルもはっと我にかえる。

「いや、すまん。それではお前が会いたがっていた魔女に会わせよう」

「おー、待ってました！　ここまで間近に来ると、妖精の香りが強いが感じられるし、これはマジ期待が大ね」

テンションが上がってきたのか、ぶんぶんと鞆を振り回すイギナ。あの中に相棒が入っているのに、その扱いはいいのかと思う千裕

「ついてこい」

すたすたと歩きだすアルの足は少々早歩きだった。

そして、神殿内にやって来た時

「でけえ！　マジでけえ！」

その巨大な空間に圧倒されるイギナに、俺も初めてここに来た時こんな顔をしていたのかなとほほえましく眺めていた千裕だったが、ふとアルの方に目を向けてみたら、なぜか先ほどまでのゆるい表情から一転、なぜか険しい顔つきになっていた。

「どうした？」

「ん　お主は何も感じないのか？」

「何を？」

「そうか　いや、なんでもない。ほら半妖精、行くぞ」

「おう！」

マグナを間近にして、意気揚揚と歩くイギナは気がついていないのだろうが、千裕は思わずアルから距離をとってしまった。

リノアの部屋に近づくとつれてアルの周囲の空気が、次第にぴりぴりと痛々しいものに変質していくのを感じる。

そして、

「おや、お前たちは」

リノアの部屋へ行こうと通りかかった応接室の前。立っていた女性が驚いた表情をして、千裕とアルを見た。

その女性は今朝方喫茶店で絡んできた真つ黒人の連れ。

きりつとした目つきで、姿勢は正しく、いかにも真面目そうな性格をしている。そして何より、喫茶店では見なかった、金色の竜の刺繍が縫われている黒服を着ていた。

千裕はまだ知らないが、彼女が身に付ける竜の刺繍は、エルミユシア王国の紋章である。

さて、どういう事だろうと千裕は考えていたが、アルはなにやら不適に笑い納得していた。

「やはりあの男がいるのか……」

誰に聞かせるともなく、小さくつぶやく声は、とても不気味なものだった。

「皆、巫女の客か？ すまないが少々待っていてもらいたい。今大切な話し合いの最中なのだ」

生真面目な女性の態度に、アルは小さく笑う。

「なに、気にするな。ワシらの仲ではないか。それに、大切に話し合うほどの内容の会話ではないだろうに」

応接室の中で行われている話しの内容が聞き取れたアルにとって、くだらないと失笑してしまう内容の話しがどれほど大切なのか。それよりも今自分が気になることを優先したいと、ドアノブに手をかけるアル。

「本当に待って下さい。先ほどのちゃんぽらんぽらん様子から想像もできないと思いますが、あの方はとても凄い方なのです。あまり逆らうような真似は……」

「いや、知っているさ。あの男竜殺しなのだろ」

「ずばりと言いついてられて女性は驚く。イギナもそのような存在がいることに驚く。」

だが、千裕だけは、その言葉の意味に嫌な予感がした。

「よ、よくご存知ですね。そうですね、あの方は四百年前に竜を殺し、



勇者となった方なのです」

四百年前、竜殺し、勇者。

そのキーワードで連想される事柄は

「そうか」

もう一度、そうかと低く唸るアルの声は、その場にいた三人を凍りつかせるほどの恐ろしさがあった。

固まる皆をおいてアルは一人堂々と入室。

「だから、俺は霸王竜が本当にいるのか、確認したいだけ　　って、おりよ？　あんた」

ソファーに踏ん反り替えるように座る真つ黒人。

そして、アルが現れたことで、あちゃーという顔をするリノアと、もう知らんとはかりにそっぽを向いたマグナ。

「あれー？　あんたは　　」

「お前が、王都からの使者だったのか」

不適に微笑むアル。今にも胸倉を掴みかかるほどの勢い。

「それほど霸王竜に会いたいか？」

「ん、お嬢さん、なにか知っている　　ぐはっ！」

言葉が言い終わる前に、アルのボディブローが突き刺さっていた。

「いつまで寝ぼけている。さっさと目を覚ましてワシに気づけ」

「がはっ　　そ、そうか……お嬢さんが……げほっ」

よほど強烈な一撃だったのか、ひゅーひゅーとおかしな呼吸になりながらも、何とか状況を把握したのか、さてどうしたものかと真つ黒人は思案し始めるが、

「さて、目がさめたところでワシから話がある。少し表にでてもらいたい」

「んー、俺としてはあんまり話すことはないんだけど」

「なに気にするな、ワシが問答無用で喧嘩を売るだけだ。ただし、代価は命で貰うがな」

「本気なんだな」

「当然。先代を倒した勇者と聞いてはな」

やれやれと本気で迷惑そうな顔をする真つ黒人のことなど無視し、一方的に。

その光景をみていたリノアはやっぱりこうなったかという顔で、せめて神殿内でやって下さいねと言うほか無かった。マグナはただ、神殿をあまり壊すなよとあまり意味のない忠告。

そして、とんとん拍子に喧嘩　という名の（アルにとっては）殺し合いが始まるうとしていた。

状況についていけない真つ黒人の連れとイギナは何が始まるのかと二人の行方をはらはらとした表情で見守り、千裕はただ右目が強く疼く感覚に囚われていた。

真つ黒人ことルードは、眼前の竜に対してどこまで本気で相手をすればいいのか悩んでいた。

目の前の霸王竜と、自分が殺した霸王竜との間にどんな因縁があったのかは知る由が無いのに加えて、王の使いとしてこの場にやってきたため、いきなり殺し殺されの展開になるとは予想外の事態。

だが、目の前の竜が本気で殺意を向けてきており、そのプレッシャーは昔対峙した霸王竜と変わらないほどのもの。

そのため、本当に殺す気でいかないと逆にこちらが本気で殺されそうな気配がひしひしとしていた。

「たく、霸王竜を名乗るぐらいならもう少し懐の広いところを見せてくれよ」

歴史に残る初代の霸王竜は、どのようなことがあっても人の味方であり続けたことを聞いたことがあるし、ルードが殺した竜も、もろもろの事情が絡み合った結果、自ら首を差し出してくれた。

苦い思い出を抑えながらも、ルードはおどけた口調でアルに問いかけてみる。

「悪いな、ワシはたかだか四百年しか生きていない子供でな。霸王竜の称号も先代から勝手に引き継いだに過ぎん」

アルの言葉に、ルードは「あんだ、まだ幼竜だったのか」と苦笑をする。

結局のところは、ただの子供のわがまま。何を言っても無駄なんだなと悟り、ルードは覚悟を決めることにした。

真っ白の空間。何も無いただっ広い祭壇と呼ばれる部屋の中央で二人は立ち止まる。

「さて勇者。覚悟はいいか？」

「なんの覚悟だよ。命を取る覚悟も取られる覚悟もまったく無いんだが」

「ふん、それは竜心炉ドラゴン・ハートを持つ余裕か？」

「お嬢さんはそんなことまでわかるのか」

「ふん、人と竜の血が混じった臭いがぶんぶんする」

忌々しいと吐き捨てるアル。

「先代の仇とワシの私怨の下、ここで朽ちる勇者よ！」

号！ と、アルが吼えた瞬間、神殿内の空気が一変した。

「精霊ども！ ワシの力を糧に働け！」

「ちっ！」

爆発的にアルの力が増幅したのを感じ、ルードは素早く言葉をつぶやくと内に眠る竜の力を目覚めさせる。

この瞬間、霸王竜と勇者の戦いが始まった。

千裕がその場で見た光景は、単純に言えば、ただの殴り合いではなかった。

素早く懐にもぐりこんだアルがルードの体めがけて拳を突き出す。狙いなど定めずただ振り回すだけ。

だが、普通の人間相手には、どこに当たろうと全てが一撃必殺の威力を持っているであろうその拳は、ルードにヒットするたびにさまざまな衝撃音を響かせていた。

ルードもただ殴られるだけに終わらず、アルが人の姿であること

を逆手にとり、人体の急所である部分を徹底的に狙っていく。

互いの持つ竜の魔力が瞬時に肉体の損傷を修復するため平然と殴りあえているが、時折ミスをして拳が地面や壁に突き刺さった時にできるクレーターが、その威力のすさまじさを物語っている。

腹に顔面にと、とにかく殴り続ける二人を見つめる千裕を始めとした観戦者達はただ戦々恐々としていた。イギナとルードの連れは、既に振るえが止まらず真っ青な顔になっている。

いや、リノアとマグナはこの喧嘩の後片付けどうしようかとそっちの意味で戦慄していたのだが。

千裕はただ一人、恐怖と同時に、どこか懐かしい光景に囚われていた。

それは千裕の記憶にない、昔の出来事。

まだ目の前の男が黒い姿でなく、自分が男を見下ろしている光景。何かを訴えるように叫ぶ男に、自分はいったいどのような答えを出したのか。

思い出そうとするほど右目の疼きがいつそう酷くなった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3941o/>

---

霸王竜は空に吼え

2010年11月6日08時10分発行